

鹿児島県立与論高等学校

校長通信

第2号 (令和6年7月8日/校長 大倉秀心)



校訓「**好学 創造 親和 不屈**」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844



2年生 台湾修学旅行

「旅は非日常、旅先は日常」

6月23日(日)から5泊6日(沖縄2泊を含む)の日程で、本校2年生の台湾修学旅行が行われました。まず、旅先が海外だったことを考えると、現地で体調を崩したり怪我をしたりする生徒が一人もおらず、無事に全行程をたどれたことだけでも、大成功だったと言っていいと思います。旅行後のアンケートを見ても、全員が肯定的な回答をしており、引率した我々としても満足しております。現地の食事に関しては口に合わなかったという意見もありましたが、今回台湾を訪れなければ一生知ることができなかったことだと思えば、これこそ国内ではできない貴重な体験だったと考えることもできます。

そもそも各自がパスポートを取得し、入国審査を受け税関を通らなければ行くことができない場所を訪れること自体が非日常体験です。「初めての海外で、自分が外国人だという感覚が不思議でした」という生徒の感想がありましたが、まさにこれが海外修学旅行の目的の一つです。最初は緊張した面持ちで入国審査を受けていた生徒たちが、空港を出てバスに乗り込むときには、ホッとしたと同時にちょっぴり自信が芽生えたような表情をしていたのが印象的でした。

バスの車窓から眺める風景に飽きることはありませんでした。町中では意外に高層マンション等が多く見られましたが、古い建物と新しい建物が混在し、貧富の差を感じることもありました。しかし、年齢にかかわらず、もの凄い数の人たちが単車で通勤・通学する様子や、朝市や夜市で地元の人や観光客に対してたくましく商売している様子を目の当たりにすると、「活気」という点では日本を上回っていると私は感じました。生徒の皆さんはどうだったでしょうか。ちょうど私は、雙連朝市で歩道の一部で商売していたおばちゃんが警察から撤収を命じられていた場面にも遭遇しました。恐らく禁止区域で商

売していたからだと思われますが、何かブツブツ言いながら片づけているおばちゃんを見ていると、彼女も必死になって日々もがきながら生きているんだなと感じることもできるのです。このように、我々のような旅をしているものにとっては奇異で違和感のある光景も、現地の人々にとっては日常の一コマなのかもしれません。

「旅は非日常、旅先は日常」

これを体験することなしに、真の意味において互いの多様性を認められる人間性は育たないと思います。ますます進むボーダーレスな社会で、様々なバックグラウンド(生育歴・経歴)を持った人たちと仲良く付き合っていくには、まずは異質なものに触れ、同時に相手にとっては自分も異質なものの一部なのだという体験を若い頃から積むことが必要なのです。そういう意味において、コロナ禍後に海外修学旅行に二の足を踏む学校が多い中、思い切って台湾を訪れた2年生の皆さんは、またとない経験を積むことができたと言ってもいいでしょう。



「信号待ちをする単車の群れ」



「雙連朝市」

感謝すること

今回、台湾に修学旅行に行くにあたり、私は台湾の人たちに対して感謝の念を持って訪問させてもらいました。それは、東日本大震災や熊本、能登半島などでの震災のたびに、どの国よりも早く億単位の義援金を準備してくれるのがいつも台湾だからです。台湾は親日の国だとよく言われています。明治時代、台湾北東部・宜蘭の初代庁長（県知事に相当）として社会基盤整備に尽力した西郷菊次郎（西郷隆盛の長男）や、不毛の大地と呼ばれていた台湾南部・嘉南平原にダムと給排水路を建設し、当地を台湾一の穀倉地帯に変えた八田與一らの功績も大きいのではないかと思います。お互いに困っているときには手を差し伸べ、それに対する感謝を別の形で表すということが日本と台湾との間では繰り返されているのかもしれませんが。今年度に入って早々、台湾東部・花蓮で大きな地震があり甚大な被害が報告されましたが、私もわずかではあります義援金を寄付させてもらいました。生徒の皆さんも、国と国との関係の歴史を知り、人としてどんな行動をすれば良いかを常日頃から考えてほしいと思います。

今回の修学旅行で生徒の皆さんから最も好評だったのはB&Sプログラムでした。生徒4～5名グループに1人の台湾人の学生さんがついて、それぞれのグループで決めた場所をコミュニケーションを取りながら巡るというものです。それぞれのグループで夕食まで済ませてホテルに到着した時の様子を見ると、どのグループも充実感に満ちており、生徒たちの生き生きとした表情からも、どれほど楽しかったのか、得るのが多かったのか伝わってきました。別れ際に名残惜しそうにしている様子からも、お互い近い年齢で相通じるところも多かったのだらうと推察されました。学生さんたちはそれぞれ別々の大学で、それぞれが自主的に本校生の案内役としてのプログラムに手を挙げてくれたとのこと。本当に有り難いことです。謝謝！
今後は、こんなにもよくしてもらった生徒の皆さんが、自分以外の人たちのために、できることは何でもしてあげられるような温かい心の持ち主に成長することを期待しています。

実は私も、生徒の皆さんがB&Sでグループ行動している時間帯に地下鉄一日乗車券を使っていろんなところを一人で巡っていたのです。皆さんをホテルで迎えるために、集合時間前にホテル最寄り駅の台北

駅で下車したのですが、駅が大きくてホテル最寄りの出口がどこだかわからなかったのです。案内板があったので、のぞき込んで出口を探していると、「M6」が該当する出口だと分かりました。その時、

「アンタ、日本人ネ？ 道が分カラナイノ？ ドコニ行キタイノ？」

と声をかけられたのです。私より少し年上（のように見える）のおばちゃんでした。

「はい、日本人です。シーザーパークホテルに近い出口を探しているんです。」

と答えると彼女は満面の笑みを浮かべて、

「ヤッパリ日本人ネ！ ワタシ日本ニ昔住ンデイタコトアルノ。ソノホテルノ出口ハコッチダネ。付イテ来テ。」

と言われたのです。出口は「M6」で、案内表示を見ながら歩けば迷うことなく一人であたり着けるとは分かっていたのですが、

「久シブリニ日本語ヲ話セテウレシイ！」

と言って嬉しそうにしている彼女の厚意を無にすることは失礼だと思い、「大丈夫です。一人で行けます。」などとはとても言えず、

「ありがとうございます。助かります。」

と言って案内してもらうことにしました。彼女がその日の夕食時に、「今日は道に迷っている日本人を助けたのよ。」などと話のネタになるのも良かろうと思ったのです。こういう些細な出来事も、庶民レベルでは立派な国際交流で、国家間の関係性向上の土台にもなるのです。今度は私も与論で困っているような観光客がいるときには積極的に声をかけようかと思う次第でした。おばちゃん、謝謝！



最後に、修学旅行に参加した2年生の皆さんが感謝すべきは、決して安くない旅行代金や現地でのお小遣いを準備してくれた保護者の皆様、そして旅行代金の一部を補助してくださった与論町に対してです。この御恩を絶対に忘れることなく、今度は皆さんにできる手段でお返しすることを考えて実行に移してください。与論高校初の台湾修学旅行に協力頂いたすべての方々に感謝申し上げます。

「謝謝!!」